

バーミヤン教育文化センターで寺子屋ワークショップ 開催

日本ユネスコ協会連盟は、日本の多くの方々からのご協力で昨年建設したアフガニスタン「バーミヤン教育文化センター」*1にて、8月8日(火)から14日(月)まで、今後バーミヤン近郊の寺子屋*2で識字クラスを担当する可能性がある人びと(教員候補者)のためのワークショップを行いました。また、同時に村びとたちが寺子屋を活用するための調整役(運営委員)を対象にしたワークショップも実施しました。

教員候補へのワークショップには、アセフ職員(日本ユネスコ協会連盟現地採用スタッフ)が面接で選考した6人と、村で寺子屋の重要性を伝えていく役目を持つ責任者2名も参加し、合計8人(男性2人、女性6人)で行われました。参加者の年齢は16歳から20歳で、いずれも8年生から12年生(日本では中学校から高校)を修了しており、バーミヤンでは高学歴の人びとでした。



教員養成ワークショップで識字の歴史について講義

ワークショップでは、アフガニスタンにおける識字の重要性(読み書きができることで人びとの生活が改善されることなど)や、教育省指定教科書に沿った識字の教授法(読み書きを初めて習う人にはどのようなことに注意を払って教えたらいかなど)、また今回開く初級向け識字クラスのカリキュラムなどの項目を、実践を交えた講義が展開されました。



試作してみた手作りの識字教材

寺子屋運営委員へのワークショップには、2つの村からそれぞれ4人が参加。いずれも村の議会の代表者で、男性2人と女性6人の計8人でした。

村の人びとが直面している問題とその解決のための要望を調査する方法や、その要望の優先順位の決め方、より多くの人びとをプロジェクトに参加させる方法などが伝えられました。

この8人全員が非識字者であり、そのうちの女性6人は寺子屋教室の学習者となることになりました。

今後、バーミヤン近郊の2つの村(ムラグラム村とハイデラバード村)の寺子屋で入門レベルのコースが試験的に約3ヶ月実施され、その結果をもって今後の展開を考えることになっています。

*1 「バーミヤン教育文化センター」についてはこちら <http://www.unesco.jp/contents/isan/report/afg.html>

*2 寺子屋についてはこちら <http://www.unesco.jp/contents/tera/index.html>